

岩波
講座

日本文学史 第一卷 古代

古今集と古今集以後

窪田敏夫

岩波書店

古今集と古今集以後

窪
田
敏
夫

目次

はじめに	三
一 『古今和歌集』へのたどり	五
二 三代集	九
1 『古今和歌集』をめぐって	九
2 『後撰和歌集』と『拾遺和歌集』と	二六
三 『後拾遺和歌集』——転換期	三三
四 『千載和歌集』への道	三七
おわりに	四〇
参考文献	四三

はじめに

この小稿は、『古今和歌集』にはしまつて、『千載和歌集』にいたる平安朝和歌の流を主として勅撰集によって辿りながら、様々の和歌に現れては消えていった現象、歌合とか、家集とかいふものについてもその流を説くための手段として必要に応じて触れるという程度を考えながら筆を取つたのである(但し歌学については全く省筆した)。その主眼とするところは、平安朝和歌の性格と、その史的展開を追つてみたいという過分の願ひをもつたのである。非力の故に必しも自ら果し得るとは言い切れないが、その目的のために、全体の説述に於いて、書物の解説、作家の解説等は紙幅の関係もあつて、出来る限り省筆した。それらは既に多くの文字史や、文学辞典等に詳説あるものである。読者に於いて参照の勞を得るならば筆者の幸である。

さて、本筋を辿る前に、ここに一言を加へたいことは、『古今和歌集』に發して、『千載和歌集』に及んだ平安朝和歌の姿を考えようとする時に、ごく平凡な一つの事實に一応の考察を加えて置くことが都合がよいと思ふのである。それはこの平安朝期に専ら行われた和歌は短歌であつた事実と、そしてこの短歌が、実は、日本文学の中に示している根強い、驚くに値いするような文学現象であるということである。

『万葉集』に、更にそれ以前口誦期からあつたとも考えられるこの短歌という一文学様式は、全日本文学史のいずれの時期に於いても、その存在を確固と維持して、今日もなおお亡びないでいる存在なのである。他の諸々の文学様式、また同じ和歌様式にしても、旋頭歌や、長歌や、仏足石歌などという歌体は、時に好事の文人にもてあそばされたことがあつたとしても、それは時代の文学史の本流に棹すことなく、多くは氣まぐれな復古趣味と消え失せてしまつたの

である。その他、物語にせよ、浮世草子にせよ、俳諧にせよ、それは、一時は歴史の上に栄えても、いつかその変貌の間にその姿を消していったのである。ただ短歌様式そのものが、全日本文学史を通して存在することは、驚くべき大きな事実であるといつてよい。明治このかた今日になるまで、短歌滅亡論⁽¹⁾はいく度か、多くの人々によって説かれたのである。にもかかわらず、今日もなお日々に限りもなく作品作家が生れ出ているのである。平安朝和歌を回想し、その歴史を辿る時に於いても、この大きな前提となる短歌様式の不思議さを無視してはならないと思うのである。即ちこの短歌という小さい一つの文学の様式が、何故にこれほどまで強く、我々の祖先ばかりでなく今日の日本人にまで結びついたのであろうか。一体、短歌の何がこんなにまで千数百年にもわたって、その継承をばゆるぎないものとさせたのであろうか。不幸にして、今日まではっきりと、この間に対する解答は与えられていないのではなからうか。実際この間に対する解答が明らかにされているならば、このような平安朝和歌史の述作も案外にらくになるのかも知れないと思うのである。つきつめて考えると、いつもその問題につき当るのである。したがって、この論述に於いても、この本質に行き当るとき動きのつかぬものを感じるのである。しかし、今は、よしそのような問題を胎むとしても、それはそれとして、平安朝期の和歌の姿を、そのあったいろいろな面から、力の及ぶかぎり、明らかにしつつ、史的展開のあとを辿ろうとするのがこの試みであると言いたい。

註

1 短歌滅亡論については左の論文を参照されたい。

尾上柴舟「短歌滅亡論」(『創作』明治四十三年十月)

釈道空「歌の円寂する時」(『改造』大正五年七月、『折口信夫全集』第二七卷 昭和三十一年 中央公論社)

久保田正文
木俣修はか「短歌滅亡論」(『短歌』昭和三十年八月)

土屋文明「短歌は亡びる」(『新潮』昭和三十一年十月)

一 『古今和歌集』へのたどり

『古今和歌集』の序に見る延喜五年(九〇五)正月十八日は、奉勅の日か、撰進の日か、疑問もあり異論もあることではあるが、⁽¹⁾日本文学の展開して来た歴史の流の上で、ともかくにも、この日は新しい指向をもった文学の誕生の日であったと考えてよいであろう。延暦十三年(七九四)平安京に都が定められて、やがてはげんらんと花開いた平安朝文学のもっとも豪華なものは、実にこの『古今和歌集』であったのである。そして、この花を開かすためには、ほぼ百年に近い歳月が用意されなければならなかったのである。それ故にこの百年は他面からみれば、ただに一つの歌集を用意した時代だけではなく、もろもろの仮名文によって作り出された平安朝文学の胎生期であり、誕生の用意の日であったとも言えると思うのである。その故に、そのような考えをもつて、この『古今和歌集』が、勅撰の和歌集として生まれでる陣痛の時期、用意の時を一応ふりかえて考えることが後に『古今和歌集』にはじまり、遠く『千載和歌集』や、『新古今和歌集』へ流れゆく、ものの力を理解するには必要なことであると思うのである。

いささか古きに遡ってみるならば、『万葉集』巻二〇の最後の天平宝字三年(七五九)正月のおとものやかもち大伴家持の作品を最後として、和歌はその姿を埋没させてしまったといってもよい。ただ『万葉集』編集の立役者と考えられもし、すくなくともこの時代の大歌人であった家持は、天平宝字三年以後も生存して、延暦四年(七八五)に没したのであるから、その晩年の二十六年の間その作歌がなかったとは考えにくいし、更にはその作品がどのようなようになったのであろうか。これは和歌史に大きな疑問といってもよい。ただ一つの臆測を試みるならば、『しよくにほんき続日本紀』の延暦四年八月庚寅(二十八日)の条、次の九月乙卯(二十三日)の条をみると、家持の死後二十余日、大伴一族のつぐひと継人、竹良等が藤原たねつぐ種継を長岡

京造営の間に暗殺したことが発覚し、死後ではあるが家持もその事件に連坐して、官位をのぞかれ、其の子永主等も流刑に処せられた記事を見るのである。種継は当時桓武天皇の信任も極めて厚く、『統紀』には「天皇甚委任之、中外之事皆取決焉。」とあるほどの人物であったことを見れば、あるいは、大伴・藤原両氏の烈しい氏族の抗争がその背後にあったかも知れないし、その為に、大伴一族に加えられたものの敵しさは、家持一家を覆滅させて、記録一切を失わせ、その故に、家持晩年二十余年の歌を失わせたのではないかと考えさせられるのである。このことは、あるいは、単に政治的な激動の間に、家持の末路を惨たらしめただけではなく、和歌展開を長く閉鎖せしめた一つの原因になったのではあるまいかと考えさせられる問題であると思う。それと共に、これは一面には、平安朝文化を形成する支柱となつたところの藤原氏政権が次第に結集されてゆく道すじを示したもので、この種継の死後、長岡京の企画を変更されて、平安京の造営と奠都がその十年近い後に行われたのであって、ここにやがて日本文学史上に特異な、そしてまた基礎的と呼んでも差し支えないほどの文学行動が展開されたのであった。

しかし、平安京に入ってから、ほぼ八百年代の半までは、ほとんどと言ってよいほど和歌は日本文学の史上からその姿を没し去つたのである。総ての日本文学史が語るように、その時期は、文学の面から見れば、漢詩文の盛行期であり、政治史の上から見れば、八百年代末に開かれてゆく藤原氏摂関政治への動きに動いていった時代であつて、そのいずれもが深く平安朝和歌の性格をば決定するのに可成り強い力を持ったものであると思うのである。即ち、漢詩文の影響は、その和歌表現の技法や発想の面において、その政治勢力の動きは、例えば大同二年(八〇七)の皇弟伊予親王の事件は藤原氏の南家の勢力の失墜を呼ぶような陰謀であるし、弘仁元年(八一〇)の薬子やくこの変と呼ばれるものも、また政治権力の争奪に後宮の勢力の波及であつたとも言えるのであって、これらは其後もいろいろな形であらわれて、高岳親王たかのかのみこの麿太子の事件の如き、後の惟喬親王の如き、それは一面には、后位、中宮位をめぐる暗闘と結びつ

いて、言うところの後宮の勢力に結びつくものであって、やがてはその後宮というものが平安朝文学を培養した温床であったことをば考えねばならないのである。かくて、この二つのものは、文徳天皇の時代、ほぼ八百年代の前半までに、一方には仮名文字の成立や通行と共に、平安朝和歌の性格決定の上に、陰に陽にその力を及ぼしたものと考うべきであると思う。

さて、このような時期に、和歌はかつて『万葉集』がしのばせ、後には『古今和歌集』がしのばせるような姿はまったく見ることが出来なかった。それは『三代実録』の嘉祥二年(八四九)三月に興福寺の僧侶等が仁明天皇の四十歳の宝算を賀して奉ったという長歌が残されている——この長歌は歌格の上で重要な資料を提供していることを五十嵐力博士は指摘される⁽²⁾——その後⁽²⁾に於いて「夫倭歌体、比興為先、感動人情、最在茲矣、季世陵遲、斯道已墜、今至僧中、頗存古語、可謂体失求於野、故採而載之。」の一文をのこしているし、『古今和歌集』が撰せられた時に於いても、その真名序には、「思継既絶之風、欲興久廢之道。」とも言っているのであるから、その事実については、勿論、否定すべくもないのであるが、しかし、長い継承をもった和歌が、一切消えさっていたのではないことはいくつかの記録によつて想像出来る。

むろん、このことについては、僅かに残る歴史の記述、しかもそれが官撰の史書に見られるだけで、外にはその時代の作とはっきり立証出来るものは今日何も残されていないが、『日本後紀』や『続日本紀』等の中に散見する十首程のものを見ることが出来る。それらの和歌の性格としては、饗宴の際のものであるし、殊に史書であるだけに、天皇に関する記事の間に見られるので、文学として此の時代にあったであろう和歌の正常な姿として、この数首を考へることには多少の無理もあろうが、『古今和歌集』の仮名序に言われている「まめなるところ」には出すことでなくなつたと文字通り考へるのは行過ぎでもあると思う。即ち、公宴の詠とでも言うべき和歌のあとをたどるならば、延暦

十四年(七九五)四月桓武天皇が古歌を誦されて、それに和する歌を尚侍従三位百濟王明信に求められたが、出来ないで、天皇自ら和した記事に二首みられる。

古の野中ふる道改めば改まらむや野中ふる道

君こそは忘れたるらめにぎ玉のたわやめ我は常の白玉

であって、歌柄は、古格を示し、繰り返しをつかった表現はほぼこの時代の姿を伝えたものと考えられる。このような公宴歌が、延暦の時だけでも十五年・十六年・十七年・十八年と見られ、更に二十二年には遣唐使を送るに際してこの酒はおほにはあらず平らかにかへり来ませと祝ひたる酒

が挙げられていて、それは『万葉集』の遺風をなお存していると言ってもよいし、またそれは、一種の儀礼的な意味も持った強い伝承もあったのかも知れない。ともかくも、かすかながら和歌はこのような姿で、公宴の場において民族の生み出したものの根強さをもって、漢詩が詠じられた世界に於いても生きつづけていたのである。然ももう一つの世界に於いて、和歌の風尚は保たれて来たと見るべきであろう。それは、古代歌謡の一群のものである。神楽、催馬楽などが、神事に強く結びついて、宮廷をめぐる行事の間に次第に貴族生活の好尚に馴らされ変化させられて存在したことは、直接的な『古今集』和歌への形成への参与はなかったにもせよ、その韻律的なものへの影響は無視することは出来ないものと考えられる。

このような状況のもとに、『古今和歌集』に見られるこの時代の古い作品は、小野篁の承和五年(八三八)の隱岐に配流される時の作である。またこれより四十年も後になって陽成天皇の元慶二年(八七八)二月二十五日宜陽殿の東廂で行われた『日本紀竟宴和歌』は、詠史であって、特殊なものではあるが、それらは細々とあった和歌が、大きく宮廷の行事の中に立ちまじることを示した注目すべき出来事で、このような時代の間に次に説くべき『古今和歌集』を中

心とする時代の和歌はひらけたと見るべきであろう。

註

1 『古今集』の成立の問題は、集中、延喜五年以後の作歌を見るのでいろいろ問題がある。また、『古今集』の諸本についても様々の異本あることをつけ加えておく。

吉田令世『歴代和歌勅撰考』全六卷(国歌大系 第四卷所収)

久曾神昇『古今和歌集綜覽』

西下経一『古今和歌集伝本の研究』

久松潜一編『日本文学史』中古

藤岡作太郎『国文学全史』平安朝篇

2 五十嵐力『平安朝文学史』上巻 第三「七五調の歌壇風靡」の項

3 続群書類従 一五輯上

二 三代集

1 『古今和歌集』をめぐって

2 三代集

平安朝和歌は『古今和歌集』によって開眼せられたといってもよいし、更に以後の和歌史は常に『古今和歌集』を意識の中に置いて展開したとも言えるのである。その流は、遠く明治の正岡子規(慶應三年(一八六七年)―明治三十五年(一九〇二年))による近代短歌の提唱にいたるまで、うちつづいたとも言える。

この歌集の解説は後に試みるが、まず一応、延喜五年(九〇五)に撰ばれたこの歌集の持つ意義について考えて置き

たい。言うまでもなくこの歌集が、日本文学史の広い分野にわたって占める意義は極めて大きいと思う。それは大別して二つの面に分けて考えられる。一つは和歌史に占めるこの集の重要さと、他は広く平安朝期の散文学への影響をはじめ日本人の日常生活の好尚の面に、この集の持つ抒情や美観を浸みこませていることである。

ここでは主題にそって、まず和歌史においてのこの集について考えたいが、この集は、最初に生れ出た勅撰和歌集であると言うそのことの持った意味の大きさである。この勅撰ということは、嵯峨・淳和の両朝に漢詩集に於いては試みられたことで、『凌雲集』(八一四)、『文華秀麗集』(八一八)、『経国集』(八二七)等の諸集がそれである。この漢詩(からうた)に対して和歌(倭歌―やまとうた)の勅撰ということは、かつて行われなかった。それはこの八百年代に於ける、和歌が、その社会に於いて考えられていた姿を示すものなのであった。その勅撰ということが、延喜のこの『古今和歌集』において、はじめて行われたことは、大きな出来事であったのである。かつて試みられなかったことが、新らしくはじめて生れでるといふことは、勿論、それが成るべくして成ったであらうし、また長い困難な開拓の日があつて成るのであらうが、その新らしいものの形成といふことは、歴史の発展の間に於いては重視せられねばならぬと思う。『古今和歌集』の形成はそのような意味で大きい出来事であった。即ちもっぱら漢詩文の重んぜられたほぼ百年の歳月を、じつと持ちこたえて来た、古代からの伝統文学が、この時代人の、よしそれが事大主義な考え方であつても、もつとも權威を認めたであらう勅撰という形で成立したことは、平安朝文学史上の目を見開らかせる事実であつた。更にそればかりではなく、この勅撰という『古今和歌集』に示されたことは、以後、大きな伝統となつて、遠く中世の永享十年(二四三八)の『新統古今集』にいたるまで、『古今集』を含めて二十一の勅撰集を撰ばせたその源をなしたのである。このうちつづいた勅撰集の形成は、その内容については多くの問題があるとしても、一つの文学行動として特異なものであると共に、日本文学史の上での偉観といつてよいかも知れないし、ここいらにまた和歌の

性格が求められるものとも考えられるのである。『古今和歌集』はそのような文学の源に立つとともに、したがって、以後の勅撰集や、その歌人たちの考え方などに、ある權威をもって、集には撰歌や編集の規準を、歌人たちには作歌の規準を与えたものとなったのである。

このような位置に立つこの集は、その成立をもって、ただちに平安朝和歌がはじめて生れ出たとする考え方は無理であっても、『万葉集』以来眠っていたものを目覚めさせて、新しい文学という舞台に立たせ、いよいよこの文学を盛んならしめた大きな作品であるということは言えるのである。このような『古今和歌集』に対する理解を前提として、さらに詳しくこの作品に立入って考えてみたい。

『古今和歌集』は全二十巻、歌数ほぼ千百首これは諸本多少の出入りがある。仮名・真名両序をそなえ、春上下二巻、夏一巻、秋上下二巻、冬一巻、賀一巻、離別歌一巻、羈旅一巻、物名一巻、恋五巻、哀傷一巻、雑上下二巻、雑体一巻、と大歌所御歌、神遊歌、東歌を収めた一巻からなっていて、このうち巻一九の雑体には長歌五首、旋頭歌四首、其他に誹諧歌を収録している。猶巻末に墨滅歌十一首を記して伝えるものもある。他の平安朝文学の作品のように、この集も諸々の伝本を有して、内容についても多少の相違を示すが、その書誌学的な面についてはここには省略する⁽¹⁾。

この全二十巻の構成は、以後勅撰集の規準となったもので、中には後にふれる『金葉和歌集』^{きんようわかしゆ}、『詞華和歌集』^{しじわわかしゆ}のごとき十巻の構成を持つものもあるが、その殆どは二十巻の体裁である。この二十巻ということとは、恐らくは『万葉集』を学んだものではあるまいかと思うが確証はない。巻にしたがって部立を試みていることは、『万葉集』が相聞・雑・問答・挽歌^{ばんか}などの分類を試みているのに比してはるかに精しくなっているが、これらは、当時の漢詩文の盛行の間に養われたものの現れであろう。勿論、分類することについては、『万葉集』中に見られる山上憶良^{やまのうえのり}の『類聚歌林』^{るいじゆかりん}の題名から察して、今日その内容分類について知るべくもないが、何等かの分類が行われたものであろうから、かなり

古い時代から行われたと見るべきであるが、『古今集』はここにやや精細な部立を行い、以後各勅撰集によって多少の変化を示すことがあつても、この方式は皆嚴重にその精神に於いて守られたと言つてよいのである。しかし、この部立はやや細かに觀察するならば、いささかの混乱を示しているので、殊に卷一九には雑体として、長歌、旋頭歌をあげて更に誹諧歌を挙げているのは、前二者は形式であり、誹諧歌は内容である混乱を示し、卷二〇が神樂歌などの形式は短歌であつても、その目的は神事歌謡であるものを収録して巻をなしていることもまた、その分類の明確を欠くと評することが出来る。

しかし、今ここに挙げた混乱は、一面に於いて、当時の和歌の姿を示したものであると言へるので、卷一九に見られる現象のようなことは、例えば長歌や旋頭歌が、本流を離れ去り、短歌が基本的な和歌の体として考えられたので雑体の枠の中に入れられたことを示していると考えられる。またその部立が以後に守られたことは、一方には歌学が進展を見せながらも、この面に論及されることのなかつたのは、『古今集』の權威が如何に強かつたかを示す現象とも見られ、当代和歌の性格を説明している一側面である。

さて、内容について見るならば、撰せられた和歌そのものに触れる前に、その序文は和歌史の面からみても問題の多いものである。そのことは二つに分けて考えられる問題で、一つは、真名序・仮名序の成立についてであり、一つはその序文の和歌論・歌学へのつながりについてである。共にここで省筆するが、弘仁頃『文鏡秘府論』(八一九)等の漢詩文の文章論的著述があつて、それらの影響下に於いて、平安朝和歌は、和歌作法を中心として歌学として進展していった一面を持つのであつて、それらは、久松潜一博士の『日本文学評論史』に於いて詳論されているが、ここではただ一つ序文について触れたいことは、序文というものが全巻の目的意図を明確に誇示する点に於いて、『古今和歌集』の序文は、当時の壮んな撰者の意気を示し、和歌復興の烽火たるにまことにふさわしいものであつた。仮名序の

末文を示すならば

入麻呂なくなりたれど、歌のこととどまれるかな。たとひ時うつり事さり、樂しび悲しびゆき交ふとも、この歌の文字あるをや。青柳の糸たえず、松の葉の散りうせずして、まさきのかづら長くつたはり、鳥の跡ひさしくとどまれらば、歌のさまをも知り、ことの心をも得たらむ人は、大空の月を見るごとくに、古を仰ぎて、今を恋ひざらめかも。

まことに堂々たる宣言である。この序文は、歌の本質・分類・起原・作家評（六歌仙評）が中心となっていて、これは必しも貫之の意見のみではなく、当時一般に考えられていた和歌への見解であったと思われる、また『文鏡秘府論』あたりの影響もあったことは、六義を説いているあたりにはっきりと出ているのである。然し詳細に見るならば、『古今和歌集』の撰歌にあたって、はたしてどれほどまでに、この序文で考えられている歌人評への態度なり、六義の歌の分類なり、人麿讚美なりが、はたしていたかという問題になると、明瞭にそれと指示することは出来なさそうである。和歌分類の六義なども、和歌発想表現の問題でなくて、出来上ったものの一応の分類とより見て取れないものがある。しかしここにも亦、漢詩文の世界を断絶しえなかったこの時代の和歌の姿があるのであるとも言えるのである。かくてこの序文が歴史的な最も大きい足跡をのこしたものは、歌学という、万葉期には見られなかった、和歌に於ける新しい分野を拓く前駆となったことであり、ささやかな事ながら、後に『古今集』の歌風が変転を見せた時にしても、人麿影供などの行事が行われたことも、一面には『古今集』序の流風余韻であったと考えられる。

次にその集をなす和歌についてであるが、この集以後の和歌展開の相を見るために、ここでやや詳細に和歌の性格に触れたいと思うのであるが、由来、『古今和歌集』の作品は常に『万葉集』のそれとの比較に於いて考える方法が取られて、しかも、それは作品の優劣論にまで展開される場合もあったのである。近世に於いても賀茂真淵が『新まな

び』に於いてこれを論じている。ただここに明治に正岡子規が、「再び歌よみに与ふる書」に於いて、「貫之は下手な歌よみにて、古今集はくだらぬ集に有之候」と記して以来、その考え方は作家を動かし、ひいては文学史家にある先入観を与えていないとは言いつてもいい。歴史的展望の場に立つとき、文学というものの考え方は時代と共に移るのである。各々の時代は、各々内容を異にして文学を生産もし、人々はそれを喝采しているのである。一時代が愛好し抜群としたものも、他の時代もまた然りとすると限らないのである。ここに『古今和歌集』を考える場合、『万葉集』の形成期から百数十年、久しく長い沈滞の時を経て、前述したような歴史の過程をもった和歌が、『万葉集』に拓かれた伝統を一面には継承しながらも、その時代の氣息の中に新風を創造したことをむしろ評価して、『万葉集』との比較に於いての優劣論は措いて、その転移の相を考うべきであると思う。

事実、『万葉集』の和歌が形成された社会と、この『古今和歌集』を形成している和歌の生まれ方とは、その社会構造も、生まれ方も大きな相違を持っていたと考えられるのである。この集を形成する和歌は、発想や、制作意図に於いて、必しも『万葉集』と共通するとは言えないものを持つのである。集められた二十巻の和歌は、その主たるものは、恋と四季歌であって、その四季歌も季節のうつり変りによせる抒情である。いろいろの部立はあっても、物名、大歌所御歌等のものを除けば、前二者のいずれにか分類し得られるとも言えるもので、その主流は、四季歌と恋であり、それはまた後長く勅撰集に、平安朝和歌の骨髄をなしたものといつてよい。このことは後に触れたいと思うが、平安朝和歌が宮廷貴族の間に維持されたための結果であつたと思う。

さて『古今和歌集』に撰録された和歌は、時代的に三つの大きな歌群に分けて考えられている。その一つは、読入しらず、次に、六歌仙、第三に貫之等の撰者時代の歌群の三群である。このことは、『古今集』の撰にあたって、その序文に明らかにあるように、仮名序には「万葉集にいらぬ旧き歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ」と、また真

名序にては「各猷家集并古来旧歌」とあるので察せられるが、その旧き歌がどの程度まで遡り得るかは全く不明である。然もその旧き歌が撰録にあたって、撰者たちの改修が加わるといふことがなかったであろうかといふことを思えば、今日伝えられている形から、直ちにその時代の古さを想像することはなかなか困難で、作家の上から言えば、小野篁(延暦二年仁寿二年
八〇二—八五二)など旧い時代と言えらると思ふ。それとまた、どのような形で、それらが、貫之の時代まで伝承されて来たかについても充分なよりどころを持たないのである。要するに、その三つに分けられ得るものは、その作歌からの印象的な表現の微妙なところにあると言ふのが間違ひの少い言い方であろう。例えば、巻四、秋上の一部を取って見ると、

題しらず

しら雲に羽うちかはしとぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月

さ夜中と夜はふけぬらし雁が音のきこゆる空に月渡る見ゆ

是貞のみこの家の歌合によめる

大江千里

月見ればちぢに物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

忠岑

久方の月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ

等見ても、忠岑は撰者の一人、千里は元慶、寛平の間(八七七—九八頃)にあったことは明らかであるが、忠岑にやや技巧の目立つことはあつても、発想の動き方や、表現の持つてゆき方や、音律の流れやに格別この四首間に大きい差があるとも考えられない。このような形が一般的には歌集にふくまれる三つの時代に分けたとしてもあるのである。それは撰者たちが一定の規準を持って撰歌すれば当然な結論でもあろうし、旧き歌を撰ぶにしてもまた、延喜の撰者の好尚にしたがつたものを撰んだであろうから、その点、このような形になったことも当然の結果であると言へる。

然もこれらに共通する傾向として、在来言われていることは、『万葉集』と比較しての姿から見ても、長歌の衰亡、三句切の傾向、助詞、助動詞の使用による声調のなだらかさ、枕詞、序詞、繰返しへの減少、懸詞、縁語の使用、譬喩、擬人等の修辞技巧の發達等が挙げられていて、『万葉集』の直截的な表現がここでは理知的な技巧的な姿に変わって来たこと等である。そして、その一般的な姿として、これをば、優美純雅とか、流麗典雅とかいう言葉で言いあらわして、それは古く賀茂真淵が手弱女振たぢやぶぢと称したものの姿をあらわしているのである。窪田空穂博士は少しく詳説されて、最も際立って感じられることは、人事と自然が一つになり、渾融した状態となって、どこまでが人事で、どこまでが自然かという見さかいがつかなくなっていること、一切の出来ごとを時間的にあつかっていることなどを説いて、その調に特徴をもち、これらの最も根本的なものとして、享樂耽美の精神のあることを指摘している。在来、説かれ来ったこれ等の見方は皆よく『古今集』一般の性格を示すものである。

春立ちける日よめる

貫之

袖ひぢて結びし水のこほれるを春立つ今日の風やとくらむ
の撰者の一首を見ても、このことは肯けると思う。

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

友則

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

敏行

あさばらけ有明の月と見るまでによしのの里に降れる白雪

是則

青柳の糸よりかくる春しもぞ乱れて花の綻びにける

貫之

初雁のはつかに声をききしより中空にのみ物を思ふかな

躬恒

住の江の岸による波よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ

敏行